■名古屋学芸大学　教養・学際編　研究紀要　第6号　2010年2月

詩「樹下の二人」への序章
Pre-Opening of the Poem “Two people Under the Tree” [Jyuka no futari]

大島　龍彦
Tatsuhiko OSHIMA

1

長沼智恵子への恋愛感情が作品上明確になった明治四十五年六月から大正三年十月までに、高村光太郎は十四前後の詩に智恵子を詠っている。が、大正三年八月二十七日、「淫心」を作詩してから大正十二年三月十一日作の詩「樹下の二人」までのおよそ九年間、光太郎は智恵子を主体的に詠うことはなかった。

何故、光太郎は智恵子を詠うことを止めてしまったのか。また、何故、大正十二年三月に智恵子の詩を復活させたのか。本稿ではこの二点について思考してみたい。

2

ところで、大正三年十月、高村光太郎は第一詩集『道程』（抒情詩社刊・自費出版・父光雲から二百円）を出版した。光太郎は『道程』の不出来を嘆きながらも、ただ、「あれを出した為に自由になつた気がするだけはよかつた」（十二月

二

二十七日付柳敬助宛封書）と言う。一体、光太郎は何から「自由」になったのであろう。

詩そのものからの自由、つまり、作詩から解放されたということであろうか。確かに光太郎は翌大正四年には一つの詩も作ってはいない。

あるいは作詩の背景にあるものからの自由、例えば、かつて光太郎は、「自分の文学過剰の彫刻に嫌悪を感じ」、彫刻の造形的純粋性を保つために「自分の文学的要求の方は直接言葉によつて表現」したという。「自由」とは彫刻に影響する青年期のやみ難い「抒情欲」からの解放を意味するのであろうか。彫刻が文学を必要としない域に達したのか、結婚後、一つも詩を作らなかった大正四年、光太郎は塑像ブロンズ「園田孝吉胸像」（元十五銀行頭取・光太郎帰国後の初めての外部依頼）を作っている。

とまれ、「直接言葉によつて表現」してきた「文学的要求の方は」、『道程』出版後、陰を潜めている。あるいはロダンの言葉やヴェルハアランの詩の翻訳によって、その文学的要求を満たしていたのかも知れない。

詩集『道程』出版の二ヶ月後の十二月二十二日、光太郎と智恵子は上野の精養軒にて結婚披露宴を行っている。この結婚を機に、父光雲から「一人立になれと言われ」、光太郎は「お金の入る道がない」から「随分困った」（「光太郎聞き書」以下回想はこれに依る）という。そこで、「てっとり早いから本を売」ったそうだが、そのようなことはいつまでも続くはずもなく、光太郎は翻訳と実家からの援助で生活していた。光太郎は当時を振り返って、「翻訳は随分やったな。アトリエの三階にこもって沢山訳した。それを智恵子がそばにいて清書する。だからあの頃の翻訳の原稿は智恵子の手のものが多いですよ」と言う。日中彫刻、燈下翻訳という生活だったようである。その為か、光太郎は医師から仕事を止められる程、たびたび眼病に悩まされている。智恵子が清書したのも光太郎の眼病のためだったかも知れない。

その頃、詩は「『明星』でも『スバル』でも第二『明星』でもみんなただ。詩で金をとったのは支那事変（昭和十二年）がはじまってから、それも『改造』や『中央公論』にだしたやつだ」と光太郎は回想している。つまり、作詩から解放され、お金にならない詩は書かなかった。従って、智恵子を詩にすることも無かったというのであろうか。

確かに詩集『道程』を刊行し、結婚を披露した翌大正四年には、既記のとおり光太郎は一編の詩も書いてはいない。しかし、昭和十四年十月一日発行の『新女苑』の編集者に頼まれて書いた随筆「詩の勉強」の中で、「智恵子とは大正

三年に結婚し、父から離れてひどい貧乏生活をつづけながら彫刻を作り、絵を描き、詩を書いた」と回想しているように、光太郎は大正五年から大正十二年三月十一日の詩「樹下の二人」までの八年間に確認されるものだけで二十六編の詩を書いている。

その二十六編の詩には、工場がよいの小娘や奇麗にお化粧した何処かの奥さまが主体的に登場しているが、智恵子の姿はない。大正五年十月一日、『感情』に発表した詩「わが家」や大正十一年五月九日作の詩「五月のアトリエ」などには智恵子が登場してもよさそうなものなのに陰すらない。智恵子が登場するのは、大正十年十二月一日、『明星』に発表した詩「かがやく朝」に、「遠い故郷に帰つてゐる人」として登場しているだけである。何故、光太郎は智恵子を詠うことを止めてしまったのか。

あるいは智恵子自身が詠われることを拒否したのかも知れない。それを実証する文献を今、私は知らないが、そう思う根拠は、大正二年の暮れから大正三年の詩「淫心」までの数詩のテーマが、余りにも露骨な性描写だからである。

例えば詩「僕等」（大正二・一二・九作）の一節に、「あなたのせつぷんは僕にうるほひを与へ／あなたの抱擁は僕に極甚の滋味を与へる／あなたの冷たい手足／あなたの重たくまろいからだ／あなたの燐光のやうな皮膚／その四肢胴体をつらぬく生きものの力」とある。あるいはここまでは許せたかも知れない。が、大正三年作の三つの詩の明らかな性描写は、智恵子の許容範囲を超えていたのではないだろうか。

「底の知れない肉体の慾は」「指は独自の生命を得て五体に匍ひまつはり」（愛の嘆美）「われらの食後の倦怠は／不思議な肉慾をめざましめて／豪雨の中に燃えあがる」（晩餐）、とりわけ、詩「淫心」の「をんなは多淫／われも多淫／飽かずわれらは／愛慾に光る」「淫をふかめて往くところを知らず」「われらますます多淫／地熱のごとし／烈烈――」などと、ここまで二人の生活を詠われ（暴露）ては、「肉と云ふものは絶対に斥ける夫婦と云ふものを作らう」（田村俊子作「女作者」）としていたかも知れない智恵子にとってはいたたまれない心境を強くしたのではないだろうか。

因みに「淫心」を『日本国語大辞典』（小学館）で検索すると、「情交をのぞむ心。性的な衝動。色欲。欲情」とある。光太郎が使用していた辞典『言海』に「淫心」の項目はないが、「淫婦」という語があり、その解説には「淫奔ナル女」とある。光太郎も流石に「智恵子は多淫」とは描けず、「をんなは多淫」と一般化し朧化している。が、「われらますま

三

す多淫」の「われら」の中に読者は智恵子をイメージする。だとすると、智恵子が詠われることを拒否した可能性は高い。

3

それでは、智恵子の詩が復活したのは何故か。

智恵子の詩、空白の九年間にその謎の答えが隠されているに違いない。次の略年譜は智恵子が詠われなかった空白の九年間を、光太郎の創作活動と書簡から独自に作成したものである。

智恵子の詩、空白の九年間略年譜（年齢は数え年）

大正三年（1914）　光太郎32歳

二月「愛の嘆美」、四月「晩餐」、八月「淫心」

十月、第一詩集『道程』（抒情詩社）刊行。

自費出版（父光雲から二百円）。

十二月二十二日、上野精養軒にて結婚披露。

大正四年　作詩なし・園田孝吉胸像

四月五日、「ロダンの言葉」翻訳開始。

（十月十五日迄には入稿済み・脚本執筆）

七月、美術評論集『印象主義の思想と芸術』（天弦堂書店）刊行。

十二月、歌集『高村光太郎・与謝野晶子』（抒情詩社）刊行。

大正三年（1914）　智恵子29歳

九月十一日、『家庭週報』（日本女子大桜風会）に詩「無題録」三編発表。

☆結婚披露・入籍せず。

大正四年

夏、智恵子、湿性肋膜炎で入院。

大正五年

五月ころ、塑像「智恵子の首」制作。

五月十七日、眼病でこの頃毎日医者通い。

十月、詩「わが家」『感情』に発表。

十一月、翻訳『ロダンの言葉』（阿蘭陀書房）刊行。

大正六年

一月、詩「花の開くやうに」・「海はまろく」・「歩いても」・「湯ぶねに一ぱい」・「晴れゆく空」・「妹に」六編の詩群を『感情』に発表。詩「無為の白日」・「猫」二編の詩を『詩歌』に発表。発表誌不明二編の詩「小娘」・「奇麗にお化粧した」を書く。

ニューヨークで彫刻個展を計画、が実行出来なかった。

☆3／31～4／28眼病、毎日午前中医者へ。

四月頃から塑像「手」、「裸婦座像」制作。

大正七年　作詩なし・「腕」、「ヒポクラテス」制作。

☆**ヴェルハアランの詩訳開始**

六月二十七日、抒情詩社の内藤氏に「小生は孤独になれ、貧になれ、今は却つて心安き事に思ひ居り

大正五年

二月六日、「女流作家の美術館」（『美術週報』掲載）。

五月五日、「女なることに感謝する点」（アンケート・『婦人週報』掲載）。

八月、新潟県東蒲原の旗野すみを訪問、油絵制作、水泳に興じる。8／25光太郎、絵はがき「智恵子の首」。

大正六年

一月一日、「私の最も幸福と感じた時」（アンケート・『婦人週報』掲載）。

七月十三日、「海か山に」（アンケート「今年の夏の計画」・『家庭週報』掲載）。

夏、福島県原釜海岸に滞在（医師の指示）。

大正七年

五月九日、智恵子の父長沼今朝吉没。

七月二十六日、『婦人週報』に「私の読書高村智恵子女史（インタビュー）」掲載。

候」と書いた。何故？

大正八年　作詩なし

☆ヴェルハアランの詩訳作業継続

☆「続ロダンの言葉」翻訳作業

大正九年

二月九日、詩「序曲」発表誌不明。

五月、翻訳『続ロダンの言葉』（叢文閣刊）

七月二十七日、詩「メロン」、八月二十四日、詩「丸善工場の女工達」（『時事新報』掲載）。

☆ヴェルハアランの詩訳作業継続

大正十年

四月、ゴッホ『回想のゴッホ』訳（刊行）。

九月、ホキットマン『自選日記』訳（刊行）

十月、ヴェルハアラン詩集『明るい時』・『午後の時』訳（刊行）。

☆十一月、『明星』復刊。詩「雨にうたるるカテドラル」作、十二月、詩「かがやく朝」、詩「ラコッチイマアチ」作。

大正十一年

一月、眼を病む（二月全快）。

大正八年

三月、順天堂病院に入院（後屈症手術）

七月、湿性肋膜炎で入院。八月三日入院中。数日後退院。後、光太郎と飯坂に遊ぶ。

十一月三日、妹チヨ、没（十六歳）。

大正九年

四月末、父の三回忌に帰郷。光太郎も参加。穴原温泉などに遊ぶ。

☆後にこの時の事を詩「樹下の二人」（大正十二年三月十一日作）に書く。あるいは詩中「冬のはじめ」とあるからこの年の十一月頃のことか？

大正十年

三月二十五日、祖母ノシ没（八十歳）。

大正十一年

☆光太郎と北条に一泊。

一月、詩「米久の晩餐」、二月、詩「クリスマスの夜」、四月、詩「真夜中の洗濯」、「下駄」、五月、詩「冬の送別」、六月、詩「五月のアトリエ」を『明星』に発表。六月二十三日彫刻制作中。十月、「徳本峠」（『旅行と文芸』アンケート）。十一月、詩「Yokkorayo!」を『ROMAJI』に、詩「砂漠」を『雄弁』に、十二月、詩「落葉を浴びて立つ」を『明星』に発表。☆早春、『明星』一行と智恵子を伴い、千葉県北条に一泊。

大正十二年　光太郎41歳

一月、詩「冬の子供」を『ROMAJI』に発表

一月、喀血（インフルエンザ）。眼病。

三月、詩「樹下の二人」作。

流行性感冒、盲腸炎。春から帰郷し病床で過ごす。

六月三日、前林家に嫁いで実家に戻っていた妹ミツ（春子の母）没（三十歳）。九月、「哀憐な美しさを見ます」「芝居好きの婦人と読書好きの婦人と」（『女性日本人』アンケート・「『心中』の新しい見方」）。

十二月、「ロダンを見遁した恨み」（『女性』「ことし読んだもの観たもの聴いたもの」アンケート）。

大正十二年　智恵子38歳

☆九月、☆関東大震災。アトリエを避難所に解放。

光太郎の眼病（日中彫刻、燈下翻訳の生活のためか）や智恵子の肋膜炎や後屈症手術での入院なども気になり、また、光太郎が大正の中頃のことを、「その頃は彫刻ばかり作っていた」と回想するように、翻訳（ロダンの言葉・続ロダンの言葉）と彫刻の関係も注意される。が、ここは、大正十二年に智恵子を主体的に詠い始めたその経緯について注目される事柄について言及してみたい。

先ず、注目されるのは大正十年十一月の『明星』の復活である。

光太郎は大正四年から大正十年の『明星』復活までのおよそ七年間に十三の詩を作り、『明星』復刊から大正十一年の僅か一年間で十二の詩を作っている。しかし、『明星』の復刊は智恵子の詩復活の直接的な原因ではない。なぜなら、智恵子はその十二詩のうち既記の詩「かがやく朝」に「遠い故郷に帰つてゐる人」として描かれているだけだからであ

七

る。つまり、『明星』の復刊は智恵子の詩の復活というより作詩の本格的復活と言える。
それでは智恵子の詩が復活した直接の原因をどのように考えたらよいのだろうか。
光太郎は詩「樹下の二人」を作った翌年、次の短歌を詠んでいる。

この人を見よヴエルハアランはわがごとく妻を恋ふゆゑ間無くし作れり

光太郎は大正七、八年、一詩も作らず、「続ロダンの言葉」の翻訳作業と平衡して、ひたすらヴェルハアランの詩を訳していた。この二年間、二人に取って、特に智恵子に取って辛いことが続いていた。
大正七年五月九日、智恵子最愛の父長沼今朝吉が他界している。結婚後もたびたび実家に長期滞在していた智恵子は、この時も実家に帰っていた。光太郎は六月二十七日、抒情詩社の内藤氏に、「小生は孤独になれ、貧になれ、今は却つて心安き事に思ひ居り候」と手紙に書いた。
翌大正八年三月、今度は智恵子が、後屈症手術のため順天堂病院に入院し、退院して再び七月、湿性肋膜炎で入院したとき、光太郎は八月三日付け智恵子の母長沼せん宛てに次のような手紙を書いている。

無事御帰国（中略）わざわざ御上京（中略）智恵子に御見舞金頂戴いたし（中略）智恵子も順調に快方に向ひ居り候へば不日退院いたし帰らるゝ事存居候　退院の上は小生付添ひ参上仕りたく十分健康恢復いたす迄保養いたさせ度又々御厄介に相成る事と存居候

光太郎は手紙に書いたように智恵子の回復後、飯坂温泉に二人で出掛け、智恵子はそのまま大正九年三月まで実家で過ごしている。その間の十一月三日、妹チヨが十六歳で他界。父の死に続く妹の死。光太郎でなくても智恵子の辛さ、悲しみが推し量られる。それを見ながら光太郎はヴェルハアランの詩を訳し続けていた。
大正九年四月末、智恵子は父の三回忌に帰郷し、光太郎は五月十日に岩代穴原温泉から智恵子との連名で水野葉舟にハガキを書いている。そのハガキに「智恵子のお父さんの三回忌の法要で急に出懸けました」とある。光太郎が後から出掛けたのは翻訳『続ロダンの言葉』の印税が出るのを待っていたからか。後にこの時の事を詩「樹下の二人」（大正十

二年三月十一日作）に描いている。詩中「冬のはじめ」とあるから、この年の十一月のことかも知れない。いつ印税が入ったのかが問題だが今ははっきりとしない。

そして、翌大正十年十月、ついにヴェルハアランの詩集『明るい時』、『午後の時』訳本が芸術社から出版され、同月、詩「雨にうたるるカテドラル」が作られ、十一月に復刊された『明星』に発表している。後に光太郎は第二期『明星』の時代を回想して、「あそこでヴェルハアランを訳さなかったら、きっとその後の長い詩は出てこなかったでしょう。（雨にうたるるカテドラル）」と言う。そして、既記のように十二月、詩「かがやく朝」の中で、「遠い故郷に帰つてゐる人」として智恵子を描いている。この「人」はやがて詩「樹下の二人」の冒頭短歌、

樹下の二人

――みちのくの安達が原の二本松松の根かたに人立てる見ゆ――

の「人」に繋がって行く。後に「樹下の二人」も『明星』ですね（光太郎聞き書）。と問われた光太郎は、「『樹下の二人』の前にある歌は安達原公園で作ったんです。僕が遠くに居て智恵子が木の下に居た。人というのは万葉でも特別の人を指すんです（一部引用）」と答えている。

おそらく光太郎はヴェルハアランの詩を訳しながら、ヴェルハアランは妻が恋しいがゆえに詩を作ったではないか。なのに私はという思いを強くしていったのであろう。

つまり、智恵子の詩が復活した直接の原因は、『明星』の復刊を背景に、ヴェルハアランの詩集『明るい時』と『午後の時』の翻訳、刊行によると言えそうである。

4

ただ、今、光太郎が訳したヴェルハアランの詩集『明るい時』と『午後の時』のそれぞれの詩と「樹下の二人」のトーンや文言が、例えば、

樹下の二人

かうやつて言葉すくなに坐つてゐると、
うつとりねむるやうな頭の中に、
ただ遠い世の松風ばかりが薄みどりに吹き渡ります。
この大きな冬のはじめの野山の中に、
あなたと二人静かに燃えて手を組んでゐるよろこびを、
下を見てゐるあの白い雲にかくすのは止しませう。

午後の時

ふたりして路ばたに腰かけよう、
苔むした古い腰かけの上に、
さうしてあなたの確かな二つの手の中に、
いつまでも私の手をあづけて置かう。

あるいは「ふたり一緒に歩いた十年の季節の展望は、」（樹下の二人）と「われらが同じ思に生きてゐてもう十五年」（午後の時）、「風」や「頭」が類似しているからといって、直接この詩のここに影響を受けているという指摘を本稿でするつもりはない。先人が指摘するようにヴェルハアランの詩の翻訳および出版に大きな切っ掛けを見ることが出来るということである。

光太郎は詩集『明るい時』の端書きに、

詩の翻訳は結局不可能である。意味を伝へ、感動を伝へ、明暗を伝へる事位は出来るかも知れないが、原の「詩」はやはり向うに残る。其を知りつつ訳したのは、フランス語を知らない一人の近親者にせめて詩の心だけでも伝へたかつたからである。

と記している。伝えたかった「詩の心」とは光太郎の智恵子への愛だったのではないだろうか。

主な参考文献

1 『高村光太郎全集』筑摩書房一九九四年十二月二十日発行増補版第一刷。
2 北川太一著『高村光太郎ノート』北斗会一九九一年三月二十八日発行。
3 『アルバム高村智恵子』二本松市教育委員会一九九九年五月一日発行。
4 大島龍彦・大島裕子編著『智恵子抄の世界』新典社二〇〇七年十月二十五日発行第四刷。
5 大島龍彦著『智恵子抄の新見と実証』新典社二〇〇八年十一月十五日発行。